

主体的な学びの習慣をつくる  
**授業づくりポイント集**

Vol. 2



会 津 教 育 事 務 所

# 活 用 の し か た

子どもが主体的に取り組んでいる時、生き生きと活動している時には、主体的に活動させるための何らかの手だてがあるものです。  
 本年も昨年の流れを引き継ぎ、授業づくりの参考にももらうため、実際に行われた授業を紹介しながら解説した「授業づくりポイント集V o 1 . 2」を作成しました。

先生方が、  
 この単元、題材で何か工夫していきたい。  
 子どもの意欲を引き出したい。  
 盛り上がる場面を設定したい。  
 など、何か参考になることはないかと思ったとき、「授業づくりポイント集」を開いていただきたいと思います。  
 そして、他教科、他校種の実践へも目を向けてもらえば幸いです。

ぜひ、日々の授業改善のために、「V o 1 . 1」とあわせて活用下さい。



## 目 次

導 入	ページ
小4 国語「アップとルーズで伝える（表現）」 具体的な活動を組み合わせ、どう進めればよいか実感させる	・・・ 1
小3 社会「喜多方ラーメンをささえるめんづくりのなぞを追え！」 地域素材の教材化を図り、総合的な学習の時間との横断的な学習に取り組む	・・・ 2
小6 理科「水溶液の性質とはたらき」 予想をもとに課題解決の方法を考えさせる	・・・ 3
中2 社会「世界と日本の人口」 生徒の既成概念をゆさぶる資料や事象提示から課題意識を高める	・・・ 4
中3 英語「Unit3 Our Sister in Nepal」 会話を通して既習事項の定着を確認し、テンポよく本時への導入を図る	・・・ 5
<b>導入～展開</b>	
小5 国語「『言葉』について見つめよう」 めあてを明確にし、推敲の観点を示す	・・・ 6
小特別支援学級(知的) 算数 お金をかぞえよう「買い物しよう」 生活と結びつく場面を設定し、子どもの興味・関心を誘う	・・・ 7
中3 理科「化学変化と電池」 身近な材料を用いた実験で解決意欲を高める	・・・ 8
<b>展 開</b>	
小4 国語「熟語の意味」 追究点を変えず、具体物や体験との関連で少しずつ実感させる	・・・ 9
小6 国語「詩を味わおう りんご」 話し合いの中からさらに焦点を絞り、交流を深める	・・・ 10
小3 算数「水のかさをはかるう」 実測を十分にさせて、1リットルますの必要性を実感させる	・・・ 11
小4 理科「動物のからだと運動」 模型を使って課題解決に向けた話し合いを充実させる	・・・ 12
小5 外国語活動「フルーツ・パフェを作ろう」 寸劇により状況設定を効果的に提示し、活動意欲を高める	・・・ 13
中2 数学「一次関数の利用」 実生活に結びついた課題設定で思わず考えてしまう授業を創る	・・・ 14
中2 保体「球技 バレーボール」 「人との関わり」を大切に、種目の特性に触れさせる	・・・ 15
<b>その他</b>	
小5 家庭「つくっておいしく食べよう」 家庭での実践と関連付け、一人一人に確かな技能を身に付けさせる	・・・ 16
中3 国語「挨拶 原爆の写真によせて」 自分なりのとらえ方・感じ方を意識させる課題を与える	・・・ 17
中1 道徳「いかに誠実に生きるか」(自主・自律)資料名「トモ君へ」 道徳の授業を充実させる特別支援教育の視点を生かした学級経営	・・・ 18
学校における食育の推進について	・・・ 19

## 具体的な活動を組み合わせ、どう進めればよいか実感させる

### 小学校 4年 国語 「アップとルーズで伝える（表現）」

「一番伝えたいことが、よりよく伝わる資料の選び方とは？」をねらいとし、導入ではまず、学校の桜の木の紅葉を紹介する記事を提示した。そしてこの内容からするとどんな写真があればよりよく伝わるか問いかけた。早速、「きれいに色づいた葉っぱのアップの写真」と声があがる。すると教師は、「例えばこんな写真？」と紅葉を遠景で撮った写真を見せた。

児童は「もっとアップがいい！」と口々に答える。教師が「どうして？」と問いかけ次々と指名すると、「色がみえづらい！」「もっと近い距離から撮った写真がいい！」「一枚一枚の色の違いが分かるから」「紅葉した葉っぱの美しさを教えてあげたいから」と様々な考えが出された。十分に考えが出たところで、教師は「じゃあ、みんなの考えからすると、こんな写真？」とアップで撮られた紅葉のきれいな写真を提示。「お～！」と満足げなどよめきが教室中に広がる。

教師はすかさず「自分の資料には、どんな写真を使うの？」と問いかけた。児童は一斉にそれぞれが用意してきた資料と写真を見比べる。本時のねらいがしっかりと確認された瞬間である。

しかし、これで全員が本当にわかったわけではない。作業に入る前に「相談したい人は前に出てきて！」と声をかけた。実物で伝えたいと考えていた児童など何人かが、教師のところに集まり相談を始めた。一人二人と納得した様子で自分の席に戻っていく。

それでもまだねらいの理解は十分ではないと予測していた教師は、しばらく作業させ、悩みがあれこれ出てきた頃を見計らい、「二宮金次郎像」を紹介するところで「仕事をしながら一生懸命勉強していた人」という内容を印象づけるためにはどの角度から取った写真が有効なのか悩んでいた児童を指名した。その悩みを紹介させ、アドバイスを求めさせた。同じように、昔は児童数がとても多かったことを紹介するにはどの写真がいいか悩んでいる児童にも紹介させ、アドバイスをさせた。

児童は自分が伝えたいことが、どの写真を使えばよりよく伝わるのか、明確な目的を持って、その後の自分の作業、そして交流活動に取り組んでいった。



#### 1、本時の学習の進め方の確認、長々と説明していないか

本時のめあてを確認した後、用意した小黒板、ホワイトボード、模造紙などで、本時の学習の進め方を丁寧に確認してしまいがちである。それでは、せっかく導入で高めた追究意欲を一気にダウンさせてしまう。本時のように、導入の活動から本時の学習の進め方と結びつき、その後も二重、三重にそれを徹底させる活動を具体的に設定しておくことは効果的である。

#### 2、学習を進める上で具体的な活動を組み合わせているか

この授業では、導入において「復習」などと意識させず、本時に必要な「アップ」と「ルーズ」という写真の撮り方の特徴を再確認させながら、それを用いてどんな写真が適切か具体的な活動で確認している。しかもそれがそのまま本時のねらいに直結している。さらに個別相談の場やアドバイスし合う場を組み合わせ設定し、学習方法を明確に意識させている。

地域素材の教材化を図り，総合的な学習の時間との横断的な学習に取り組む

小学校 3年 社会「喜多方ラーメンをささえるめんづくりのなぞを追え！」

子どもたちは，総合的な学習の時間（以下「総合」）に市内のラーメン店を調べ，麵の原料として地元産の新品種小麦「ゆきちから」の存在を知った。本時は，その時の学習と社会科「工場のしごと」を横断的に関連付けた授業である。

教室には，総合で調べた資料や工場見学時の写真が掲示されており，教師はこれらを使って子どもたちと一緒にこれまでの学習を振り返った。次に教師はおもむろに2枚の写真を黒板に貼り，反応を確かめるように子どもたちの顔を見回した。

写真には，

ふつうのラーメン	550円
----------	------

ゆきちから麵を使ったラーメン	800円
----------------	------

と付記された，湯気が漂う美味しそうなラーメンが写っていた。

市内に数多くあるラーメン店の中で「ゆきちから麵」を使ったラーメンが食べられるのは只1軒であること，また「ゆきちから麵」を製造している工場はわずか一つしかないことが教師から知らされた。

「その理由はなぜか」との教師の問いに，『ゆきちから』は「値段が高いから」「収穫量が少ないから」「麵の製造が難しいから」「地元で生産された小麦を原料としているから」など，総合で調べたことをもとに子どもたちは次々と発言した。

教師は子どもたちの意欲の高まりを感じ取りながら，「では，どうして『ゆきちから』を作るんだろう」との中心課題を投げかけた。子どもたちは自分のノートを広げ，「おいしいから」「喜多方で作られているから」など自分なりの考えを書き，それをもとにしてグループ毎に活発な話し合い活動へと入っていった。

1，社会科と総合的な学習の時間が有効につながっているか

本事例は，地域素材「喜多方ラーメン」をもとに3学年の学習内容として教材化し，探究活動の中で新たに発見した「ゆきちから」の追究をとおして，子どもたちの思考力や判断力，表現力を育成することをねらいとしている。「喜多方ラーメン」が児童にとって身近な社会的事象であるために関心・意欲が高く，総合で観察・調査した事柄が社会科での思考や判断の根拠として活用することができるなど，総合と社会科が横断的につながり合っている良い事例である。



2，地域素材の教材化が効果的に行われているか

地域素材を教材化する際の視点として，以下の4点が挙げられる。

児童の生活とのかかわりが深く，興味・関心を引き起こすことができるもの。

児童が地域の体験活動にひたり，発見することのできるもの。

人々の願い・苦勞が浮き彫りにされ，人々の生活の向上をめざした動きがとらえられるもの。

児童の力で追究でき，追究することにより問題が発展し広がりや深まりが出るもの。

このような視点で見ると，本事例はすべての点で地域素材である「喜多方ラーメン」が効果的に教材化されていることが分かる。地域社会を構成する《ひと・もの・こと》との直接的な出会いをとおして，子どもたち一人一人が地域に誇りと愛情を持ち，公民的資質の基礎を培っていきたい。そのために，学習指導要領の目標と内容に照らし合わせながら，地域素材の教材化に積極的に取り組みたい。

## 予想をもとに課題解決の方法を考えさせる

### 小学校 6年 理科「水溶液の性質とはたらき」

鉄が溶けた塩酸の液を蒸発させて得られた粉末（塩化鉄）を提示し、塩酸に溶けた鉄はどうなったのか、この粉末は鉄なのかと教師が問いかける。子どもは興味を持って粉末を見ている。子どもからは、「粉のような鉄ではないか」「砂鉄だと思う」などの意見が出てくる。ほかの子どもはどう思うかを挙手させるとほとんどの児童が鉄と予想する。

なぜ鉄だと思うかと予想の根拠をたずねると「鉄を溶かした液だから」「液を蒸発させると溶けたものが出てくるから」という意見が出てくる。

食塩などを溶かして水を蒸発させると食塩が現れてくるということを5年生の「ものの溶け方」で学習しているが、そうした考え方に表れているのかもしれない。予想の根拠を聞いてさらに鉄であるという思いを強くした子どもが多かったように見えた。

どんな実験をして、どんな結果が出れば鉄といえるかと子どもに問いかける。子どもから「磁石」「豆電球」「磁石につけば鉄だ」「鉄なら電気が流れ豆電球がつく」などが出てくる。「磁石につくか」「電気が流れるか」以外に鉄かどうかを確かめる実験も考えてやってみようという指示してペアでの実験が始まった。

子どもが「鉄ならば になるはずだ」という見通しを持って意欲的に実験に取り組んでいた。

#### 1、根拠を持った予想を大切にしているか

根拠に基づいた予想を考えさせることで、子どもは予想の根拠を今までの経験・観察実験と関連づけていくので、知識や技能の「活用」を図る場面になる。また根拠を書かせたり述べさせたりすることで、どのような知識を活用しているのか、どのような認識をしているのかが分かり、つまずきへの手だてが見えてくることもある。そして何より子どもが自分の考えが正しいかどうか確かめようという主体的な活動に結びつくことになる。本事例でも自分の予想を確かめようという姿勢が見られた。漠然とした根拠にならないように、「そう思うのは」という理由を考えさせる教師の意図的な問いかけを大切にしてほしい。

#### 2、課題を見つけ、自ら課題解決のため計画を立てることを大切にしているか

理科における言語活動充実のポイントとして「問題を見だし観察実験を計画する学習活動」が挙げられている。課題を追究する場面において、予想や仮説を持ち、どのような検証が必要かを考える際には、今までの経験や知識・技能を活用し話し合うことが大切となる。それが思考力・判断力・表現力の育成に結びついていくことになる。また「もし自分の予想や仮説が正しければ、このような検証をしたらおそらくこのような結果になるだろう」と見通しを持って行うことは、予想の成否にかかわらず、子どもに実感を持って理解させることにつながる。

ただ、どんな知識・技能を活用すればいいのか、何を検証すればいいのかのヒントを与え、子どもに考えさせるための手だてを講じる必要がある。

本事例で「鉄ならば になるはずだ」と鉄の性質に着目させたことが、解決すべき内容と方向性を示すことにつながったように思われる。実験自体がそれほど高度でない場合は、いつも教師の方で解決のための計画を示すだけでなく、自分たちで考えさせてみることも検討してほしい。



## 生徒の既成概念をゆさぶる資料や事象提示から課題意識を高める

### 中学校 2年 社会「世界と日本の人口」

教室のスクリーンに、オバマ大統領，ベッカム選手，金妍兒（キム・ヨナ）選手など見慣れた顔が次々に映し出され，生徒の顔には自然に笑みがこぼれる。続いて世界各地の民族衣装を着た人々と世界地図がオーバーラップして映し出され，生徒の意識は世界的な広がりへと導かれた。日本の文化や伝統について学習していた前時までの視点から，世界の様々な国々について学習する本時の学習の視点への切り替えが，興味・関心の高まりと共にスムーズに行われ，「今日は何を学習するのか」といった期待が生徒たちの瞳の輝きに感じられる。

次に教師はパソコンで国連統計データサイトにアクセスし，今現在の世界人口である〔6830741083〕(人)を示すカウンター（人口時計）を生徒に提示した。毎秒3～4名ずつ，もの凄いスピードで増加し続ける数字に生徒は唖然とした表情を見せた。教師は，生徒の声にならないつぶやきを確かめるように教室中を見回した後，『世界の人口の特色や問題について考えよう』と，本時の課題を提示した。「人口が多い地域はどこなところだろうか」との問いに，「交通手段などが発達している国であろう」「気候が良いところは人口が多いだろう」など，既習事項をもとに自分なりの予想を立てながら，課題追究に向けて意欲的な学習活動が始まった。

#### 1，課題との出会いを大切にしているか

少子・高齢化が進み，緩やかに人口減少が進んでいる日本に住む子どもたちにとって，本時の基本的事項である「人口爆発」の問題は身近に感じられる事象ではないだろう。特に，豊かな自然に囲まれ，衣食住への不安が無く，過疎化こそがむしろ問題視されている会津に暮らす生徒にとっては尚更の印象がある。

本事例では，刻々と増加する人口時計の数値を目にし，すべての生徒が衝撃を受けていた。食糧不足や環境の悪化，資源の枯渇等，これまで漠然と感じていた諸処の問題が，生徒にとって現実且つ深刻な問題へと変化した瞬間である。

課題との出会いにおいて，生徒がその意味や価値に気付けるような資料や具体物を提示することは重要であり，以後の学習活動に意欲的に取り組めるかどうかを左右する大切な要因の一つである。社会科では，特に，文字だけでなく，図，表，写真などを効果的に活用し，視覚的にも理解を深める配慮をしたい。プロジェクター等の視聴覚機器を用いて，図やグラフを効果的に提示し，そこから分かることを読み取らせることは効果的である。



#### 2，課題意識を高める工夫をしているか

資料提示や発問構成の工夫，体験的な活動の工夫などにより，生徒の課題意識や追究意欲を醸成することができる。本事例のように，生徒の既成概念をゆさぶる資料や事象の提示などと結び付けた発問から本時の学習課題を提示したことにより，生徒一人一人が課題意識を強く持つことができた。特に，課題提示の後に自分なりの予想を立てさせたことで，追究に向けての見通しをしっかりと持つことができ，主体的に課題を解決していく「問題解決的な学習」が展開された。

会話を通して既習事項の定着を確認し、テンポよく本時への導入を図る

中学校 3年 英語 「Unit3 Our Sister in Nepal」

本課に9時間を配当して、本時は5時間目の授業である。元気にあいさつを交わす。続いて現在完了形定着確認のために、テンポよく笑顔で一人一人に異なった質問をする。

T: Have you ever been to Tokyo Disneyland?

S: Yes, I have. 等々。



生徒達も笑顔で答える。授業開始直後の見事な雰囲気作りである。

間をおかず、今度は既習事項である不定詞（形容詞的用法）定着を図るためのディクテーション（書き取り）を実施する。2回聞かせて答え合わせをする。聞き取る内容や綴りを誤ってしまった生徒は、プリントの裏を使ってすぐに練習をさせる。

ここまで約7分。いよいよ本時への導入が始まる。本時のねらいは原因を表す不定詞の用法を理解し、うれしいことなどの理由を表現しようというものである。まず英語によるモデリング、カードを活用しての英文作成を支援する。その後は、どんどんピクチャーを用いて口頭練習をさせる。生徒達は教師のテンポのよさに負けじと大きな声で口頭練習を繰り返す。定着に必要な練習量が十分確保されている。このテンポのよさは、教師と生徒の信頼関係が構築されて初めて生み出されるものであろう。

### 1、量と質を充実させて既習事項の確認しているか

内容や量、授業時間数を考えたとき、中学3年の教科書に出てくる文法事項の定着をどのように図るかは、常に大きなテーマである。家庭学習を主にして生徒個人の努力にゆだねることは容易であるが、授業の中で生徒一人一人がどの程度理解しているかを教師は常に確認しておく必要がある。そうすることで自身の授業改善につながっていく。

本事例は、会話を通して短時間で効率よく一人一人の定着度をチェックする方法を取り入れている。併せて、聞かせて書かせるというディクテーションも行っており、その有効性を忘れてはならない。特に、受験を控えた中学3年生にとっては意義のある指導法の1つであろう。

1時間の授業の中で、指導事項定着のための練習量確保と、その練習をさせるためにどのような手段を講じるかは常に配慮する必要がある。

### 2、生徒とのやり取りをしながら本時の導入をしているか

授業の冒頭で、笑顔で生徒と英語によるやり取りをすることは常に大切にしたい。ルーティン化したあいさつではなく、一人一人に異なった質問を投げかけることで、益々生徒は授業に引き込まれる。

また同時に、生徒同士で既習の慣用表現を授業の中で積極的に使わせることも参考にしたい。中学校3年間で習う慣用表現は、普段の英会話でも頻繁に使えるものが多い。ぜひ自然に口にすることができるように、教師が意識してやり取りの中で使っていきたい。

## めあてを明確にし、推敲の観点を示す

### 小学校 5年 国語 「『言葉』について見つめよう」

前時に手紙を書いて、本時はその推敲を行う。

まず、教師が手紙を書いてみた感想を発表させた。「初めて手紙を書いた」「大人の人に書くので緊張した」「書いているうちに先生に会いたくなかった」という感想を踏まえ、もらってうれしくなるような手紙を書くために「相手を思い浮かべながら書くこと」「心を込めて書くこと」が大事であることを再確認させる。

次に、自分の手紙をよりよい文章にするために、「推敲」の必要性とその方法を記入した模造紙を黒板に貼って確認した。推敲はレベル1から3まであり、

レベル1は誤字脱字、句読点、敬体の確認

レベル2は読み手（お世話になった先生）に喜んでほしい、成長したなと思ってほしい内容になっているか（参考にしたい、まねしたいと思うところがあるか）、さらに付け加えるところ（アドバイスをしたい、直したい）があるか、の確認

レベル3は自分の書いた文章を書き直したり付け足したりする

といった内容が簡潔にまとめられていた。

教室全体が静かに教師の説明を聞き、子どもたちが「早く書きたい」という気持ちになっているのを見取った教師はすぐに説明を切り上げ、グループで推敲作業に入るよう指示する。あわせて教師は推敲のポイントが記入された「相互評価カード」を児童に配付し、黒板の留意点とあわせながら推敲するように指示した。このクラスは話し合いの訓練が良くできており、お互いが話し聞く過程を通してお互いの手紙の推敲を進めていった。



#### 1、めあてを明確にして動機付けを図っているか

「書く活動」は、「読む活動」よりも児童にとっても困難感を伴うことが多い。その原因として、児童の側には、何を書いてよいのか分からない、どのように書いたらよいのか分からない、書くのが面倒、などの原因が考えられる。

児童は何度か意見文や報告文を書く過程を経ているが、なかなかあらたまって手紙を書くことは経験がなかった。そこで教師は、前時において受け取る側の立場を意識させ、もらってうれしくなる手紙はどのようなものかを内容や言葉遣いに留意させながら話し合わせた上で、手紙を書かせた。本時では、前時を踏まえながら、再度、受け取る相手を意識させ、児童の書く意欲を高めていった。

#### 2、書く意欲を高める手だてを用意しているか

何をどのように書いたらよいか分かっている児童は、さほど困難を感じず書いていくことができる。しかしそうでない児童のためにグループ学習を取り入れ、話し合うことを通して書く内容を見つけさせていった。このクラスではグループ学習に慣れており、対話及び推敲が進んでいった。

推敲の際には手順を三段階のレベルに分けて「見直しシート」で示した。推敲の観点を簡潔に示すことで、児童はどのような点に留意すべきかが分かる。また、どうすればよいか分からないという曖昧な状態からどうすればよいかお互いに明確になっていくことで、児童同士が自分や相手の文章の良い点、足りない点についてのアドバイスにつながる。

授業の最後で「どのような点に注意すればよいか分かった」「今度はもっと中身についてのアドバイスがほしい」という感想が出ていたのは、自分の手紙をさらに良いものにしていきたいという向上心の現れと感じた。



## 生活と結びつく場面を設定し，子どもの興味・関心を誘う

### 小学校 特別支援学級(知的) 算数 お金をかぞえよう 「買い物しよう」

教室環境を工夫し，お店らしい雰囲気 の 掲示や売り場が作られている。子どもたちが好みそうな菓子類や日用品などの空き箱(値札付)が，100点近く棚に陳列されている。教室の中央には，レジスターがあり，品物をバッグに入れるための台も準備されている。児童から，「今日は何を買おうかな」といった期待感に胸がふくらんでいる様子が見えた。

#### 200円で買い物をしよう

・児童の算数や生活経験の実態に応じた課題を設定し，ちょうど の 買い物とおつりのある買い物ができる硬貨種を渡す。(選ぶ。)

#### お金の出し方に気をつけて買い物しよう

・お菓子ばかりを選ぶ児童，レトルト食品に手に出す児童と，それぞれが自分の好きな物を楽しそうに買い物がごに入れていく。教師は，児童の実態に応じて，値札の確認や電卓の使用などを助言していた。

・児童は，レシートの金額の数字を見ながらお金を支払うようにする。

・買った物，残ったお金を児童が互いに見せ合って，買い物ができたことを認め合う。

#### 役割を交代

・2回目の買い物では，上位児童が店員になり，合計金額やおつりの計算に慣れるようにしていた。

・買い手，売り手に役割を分担し，硬貨や品物の操作，児童間のやりとりを大切にしていた。

(店員，お客になることで互いに「学び合い」が実感できる状況)

## 1，体験的活動を多く取り入れているか

知的障がいのある子どもたちにとっては，机上の学習だけで日常生活へ応用させていくのは，難しい面がある。本授業では，本当のお店に買い物へ出かけるための準備段階として，実際に近い場面を設定し，本物の商品を数多く準備することで児童の興味関心を引き出していた。また，一人一人の進度，数概念の学習状況に応じた課題を与え，具体的な手だてに基づき適切な支援を行うことで学習意欲の向上を図っていた。児童たちは，買い物に「行ってみたい」という期待感や「お金を使うことができる」という自信を持つことができた。



## 2，算数だけではなく，教科・領域との関連を考えているか

知的障がい児に対しては，教科別の指導に加えて，生活単元学習などの各教科・領域を合わせた指導形態が多くの学校で行われている。

「金銭」の指導では，次の3つが主な指導目標として考えられる。

お金の種類が分かる。

お金を数えられる。

お金の計算ができる。

お金の学習では，日常の数の指導で扱うことの少ない100，200という大きな単位の数字も必要となる。そのため，100単位で数えることが難しかったり，等価が理解できなかったりすることが多く見られる。本授業のように実体験が少ない児童にとって，具体的な買い物場面を設定して，お金のやりとりなどの操作を取り入れたことは大変有効であり，一人一人の目が輝き，意欲的に取り組む姿に結びついていた。

## 身近な材料を用いた実験で解決意欲を高める

### 中学校 3年 理科「化学変化と電池」

実験を通して電解質の水溶液に2種類の金属を入れると電流が取り出せることを知り、どんな金属の組合せが一番多くの電流を取り出せるかについて考え、使用する金属など自分たちで実験の計画を立てさせるという授業の流れであった。

イオンについての復習のあと、グレープフルーツと銅板、亜鉛板を使って電子オルゴールを鳴らせるかどうかを生徒に質問する。

果物電池を知っている生徒は「オルゴールが鳴る」と答えるが、知らない生徒はその脇で「え！鳴るの？」とつぶやく。「ではやってみよう」と教師の方で演示実験をする。電子オルゴールが鳴って「当然」という顔をしている生徒や、「おー」と驚いている生徒もいる。

では「身近な材料を使って簡単な電池はつくれないだろうか」ということで10円玉と1円玉を示し、「これで電子オルゴールを鳴らせないか」と問いかける。生徒からいろいろなつぶやきが出てくる。「それでは実際にやってみよう」と演示実験をする。生徒は興味津々で教師の行動を見つめ、電子オルゴールが鳴ったことに驚きの声が出る。生徒達は自分でもやってみいたいという表情であり、班ごとにやるための材料を配付して次のような指示をした。

- ・ 10円玉と1円玉の間に食塩水を染み込ませたろ紙をはさむこと
- ・ 得られる電流が少ないので直列にいくつつなくこと

生徒は意欲的に取り組み、鳴ったことに歓喜の声を上げていた。生徒が興味を持って取り組めたため、10円玉、1円玉同士では電気が流れないこと、食塩水などの電解質溶液が必要であること、+、-があることをしっかり理解できた。

では、どんな金属の組合せが電流が得やすいか、食塩水以外の電解質の水溶液ではどうなるかを考えて、実験の計画を立てようと授業が進んでいった。

生徒が教師の問いかけにしっかり答えており、実に反応がよく、楽しそうであった。



#### 1, 導入での演示を工夫しているか

復習から、「今日の実験は・・・」と教師の方でねらいや実験を示す場合もあるが、生徒に主体的に取り組ませる場合は、導入で生徒の知的好奇心を喚起させる手だてを工夫することが大切となる。本事例の果物電池は教科書にも掲載されている内容であるが、実際に演示をすることで本時への意欲につながることで改めて確認できる。「あれ、なんでだろう」「どうしてかな」という生徒の既成概念をゆさぶる教材をいつも準備できるわけではないが、生徒の解決意欲を引き出す教材や教師の問いかけなど、課題を把握させるために前時の復習だけでないちょっとした工夫を考えてほしい。

#### 2, 興味を喚起する教材開発を検討しているか

教科書に掲載されている展開や素材は、学習指導要領に示された内容を踏まえ、効果的に進めるために十分に検討させている。すでに実践している先生方も多いが、ねらいや教師の思いによって方法や素材を工夫したり、追加したりすることは大切なことである。本事例の11円電池は身近な材料を活用し、興味を持って取り組ませながら、電池のしくみを理解するのに非常に効果的であった。教材開発やその教材を活用した授業展開を工夫することで教科書だけに頼らない魅力ある授業づくりに努めてほしい。

## 追究点を変えず，具体物や体験との関連で少しずつ実感させる

### 小学校 4年 国語「熟語の意味」

熟語の意味を正しくとらえて使うには，文脈をきちんとさせる必要があることに気づかせようと，めあての確認の後，教師はまず，『きょうそう』って読む漢字いくつ知っている？』と問いかけた。

児童からいくつか出たところで，教師は『パン食いきょうそう』だと，どの漢字を使う？』と問う。児童は即反応する。「競走！」「競争！」「争うから。」「走るから。」と意見が分かれる。具体物などでそれぞれのイメージを確認させるが，お互いに納得するだけの判断がつかない。教師は「イメージはわかるけど，どっち？』とさらに追い込む。児童たちは当然情報不足から答えられず，悩んでいる。

悩ませたところで，教師は助け船を出した。「では，こんな文だったらどっちが分かる？』と，「僕は，パン食いきょうそうで，直也君に負けました。」を提示した。すると，児童たちは一斉に活気づいて「競走！」「直也君は足が速いから」と言い始める。さらに教師は『競争』よりも『競走』がぴったりだともっとわかりやすくするには，もう少し言葉が必要なんじゃない？』と問いかける。児童は「運動会の」をつけ加え，「これならわかるよ。」と満足げ。

このあと，『競争』が使えるようにするにはどんな言葉が必要か？』と問いかけ，食べることが得意な男子児童の名前を挙げながら，確認し合った。熟語を正しく使いこなすには，文脈を明確にさせることの大切さが，さらに実感できていた。



#### 1，追究点を一貫させ，あくまでそれを追究させているか

めあてで提示されたことを追究していく時，そこまでたどり着くまでにやるべきことを細かいステップに分けて確認する。それは必要なことだが，教師が細かく分けた学習の一つ一つを，そのまま児童生徒にやらせようとしてしまうと，大きな過ちが生じる。教師は「わかる授業」をつくらうとするあまりこのようにしがちだが，児童生徒にとっては，教師に細かく指示されながら一つ一つのステップを踏んでいくだけになるので，先の見通しを自分で立てる主体性が引き出されず，意欲が著しく削がれてしまう。

この授業のように，追究すべきポイントを初めに児童生徒に明確に意識させたら，そのポイントは変えずに，それを明らかにするために，あれこれと試していくことができるよう学習活動を組み立てたい。

#### 2，追究している課題が，具体的な活動を通して少しずつ明らかになる喜びを実感させているか

考えては課題が少し明らかになり，また少し考えては明らかになる。それが具体的な活動を通して，自ら気づき，実感できることで，追究意欲はますます高まっていく。本時の授業では，「パン食いきょうそう」の説明や，児童の実体験が想起されることなどで，充実していた。

## 話し合いの中からさらに焦点を絞り，交流を深める

### 小学校 6年 国語「詩を味わおう りんご」

前時の詩の読み取りの後，子どもたちがノートにまとめた感想をもとにグループでの話し合い活動を行った。各グループとも話し合う雰囲気が出ており，それぞれの子どもの感想に対して，他の子どもたちは真剣に聞き取っていた。真剣に聞く態度が，話す側に「自分の感想を聞いてもらっている」という安心感をもたらし，しっかり話そうという態度を育てているという印象である。

次に，教師がグループ内での話し合いを聞き取り，簡潔にまとめて紹介し，全体での話し合いに移った。子どもたちは新たな感想を聞き，ここでも活発な発言がなされ，中には意見の交換をメモしている子どもも何人か見られた。

話が詩の主題に絞られてきたとき，教師はもう一度グループで話し合いを指示し，全体の討議の中でも話題になった「かかへきれない」という語感，「りんごが一つ/日当たりにころがっている」のイメージに注意して，という視点を与えた。

絞られた視点にそって，再度話し合いが始まり，辞書で意味を確認したり，お互いの印象を述べあって盛り上がりたりしたところで，教師は全体での話し合いに再度戻して発言を促した。

すると，りんごの「色」のイメージ，また「日当たり」に「ころがる」りんごの印象，などより具体的にイメージされた情景をもとに，作者の気持ちを考察する発言が相次いだ。

#### 1，交流させた後のさらなるポイントを明確にする

教師は，グループと全体の話し合いの過程で，お互いの読みを交流させ，徐々に視点を絞っていった。活発な発言の要点をまとめ，板書を極力抑えてテンポ良くグループと全体で討議を繰り返す。同じ過程を繰り返すと間延びしてしまう恐れがあるが，新たな視点を提示し詩の主題に迫ったことで，子どもたちは集中力をもって話し合いに取り組んでいた。そのことで子どもが読み過ぎていた詩の言葉の持つ意味に気付き，この詩をより具体的で鮮やかなイメージを伴ったものに深化させることができた。

#### 2，話し合いができる雰囲気づくりに心がけているか

話し合い活動は，子どもたちの読みを交流させ深めていく上でたいへん有効なものである。しかし，自分の意見を述べることに自信を持っていない子どももあり，ともしれば話し合いが一部の子どもものになってしまうこともある。

この教室ではグループ内でも全体でも，意見をしっかり聞こうという態度が感じられたのが印象的であった。同じ学校で低学年のクラスも参観したが，「話をしっかり聞く」ということが子どもたちに意識づけられているのを感じた。安心して話せる，真剣に聞いてもらっているという意識が子どもたちの発言を活発にする。この学校では，学年を越えた継続的な指導によって，話し合える学級の雰囲気がみごとにできあがっている。



**実測を十分にさせて，1リットルますの必要性を実感させる**

**小学校 3年 算数 「水のかさをはかろう」**

先生「今日のはかるのは，これです（水の入った2リットルのペットボトルを取り出す）」  
児童「えー，はかれるの」  
先生「何デシットルか予想しよう」  
児童「昨日はかったのが9デシットルだから10デシットル以上ある」  
「12デシットルくらいかな」  
先生「これからはかってもらうから，各グループでていねいにはかってね」  
子どもたちは，はかりたくてしょうがないといった様子で，4～5名の班に分かれて作業する。

1 班	2 班	3 班	4 班	5 班
19と少し	19と半分	18と少し	20と半分の上	19と半分の上

児童「えっ，20をこえたの」  
児童「数えまちがいじゃないの」  
みんな集まってきた。  
児童「僕のところは，19と半分だった。少しこぼしたかも」  
先生「どうだった，どんなこと感じた？」  
児童「はかるのがたいへん」「多く入れすぎたかも」「少なかったのもあったかも」  
「たくさんで，途中で数え間違ったかも」  
先生「どんなますがあればいいかな」  
児童たち「もっと大きいますではかる回数を少なくした方が良くと思う」  
先生「実はあるんだよー」  
児童「すげー」「おー」「あっ，これじいちゃん持ってる。消毒液はかるやつだ」  
「10に分かれてる」「10デシットルだ」  
先生「1リットルと言います」  
児童「その1リットルますではかってみたいよ」  
先生「やっていいよ」  
児童「すげー，ぴったり2リットル。20デシットルだ。」「リットルますってすごく便利だな」

**1，子どもたちは「実際にやってみよう」**

実験・実測の重要性が叫ばれ，算数・数学の授業でも，実験・実測が取り入れられている。しかし，その多くが「演示」に終わっている。先生が，やってみて「ほうらね，すごいでしょ」と言う，子どもたちはそれを見て「すごい」と言う。これで終わりでは，子どもの学習意欲は減退してしまう。子どもは「先生だけ楽しんで，うらやましいな。私たちもやってみよう」と思っているのである。時間の問題はあるだろうが，実験・実測を十分に組み入れ，子どもの期待に応える授業をつくりたい。



**2，実生活で必要ない「デシリットル」をなぜ扱うのか。**

デシリットルは，実生活ではほとんど使われないことがない。そんな単位をなぜ授業で扱うのかという議論が以前よりある。この議論の答えがこの授業にあった。「デシリットルは操作させるのにぴったりな単位だからはずせない」のである。

## 模型を使って課題解決に向けた話し合いを充実させる

### 小学校 4年 理科「動物のからだと運動」

蝶つがいで2つの板をつないだ骨の模型を示し、骨だけでは動かないことから、「うでがまがるしくみを上下の筋肉の動きからさがす」というのが本時のねらいである。

課題追究に際して、ストッキングでくるんで筋肉に見立てた腕の模型を班ごとに与えた。追究の視点は、

- ・実際の腕の曲げ伸ばしから「見た目」の変化や触ったときの硬さはどうか
- ・曲げ伸ばしした時に模型の筋肉はどうなるか

子ども達は、自分の腕や友達の腕を観察したり、模型を動かして筋肉の部分がどうなるか意欲的に調べた。

「腕を曲げると上の筋肉が硬くなった。」

「模型では上の筋肉が縮んで下の筋肉が伸びた。」

「曲げると下の筋肉は伸びるんだ。」

「力をいれて伸ばすようにすると下の筋肉が硬くなる。」

「模型では下の筋肉が縮んだ。」

「筋肉は縮むと硬くなるのかな、伸びると柔らかくなるのかな。」

「上と下の筋肉の動きが反対だ。」

子どもからいろいろな気づきが出てきた。

話し合いでは友達の気づきを自分の腕で確かめたり、模型で確認したりしている。自分の腕の脇に模型を持ってきて一緒に動かしながら、自分の考えを友達に説明しているグループもあった。

#### 1、追究に役立つ教材を準備しているか

腕を曲げたりのばしたりする際に、対となる筋肉が関連していることを理解するためには腕を動かして筋肉を触るだけでは難しい。映像資料なども効果的であるが、内部の構造を単純化して注目すべきポイントを押さえた模型は、子どもの気づきや思考を助け、子どもの実感を持った理解に役立っていた。自作教材は作成や改良に時間がかかるが、時間をかけた分だけ手応えを感じる授業展開ができるものである。今回の授業のほか、自作教材が授業の中で有効に機能していた実践が他校でもいくつも見られた。一人では負担が大きいのでアイデアを持ち寄り、協力して作成し学校の財産としてほしい。

#### 2、話し合いを活発にするための手だてはあるか

自分の考えや思いをうまく伝えたり、友達の考えを正確に聞き取ったりすることがうまくできる子どもばかりではない。イメージ図を活用したり、今回のように模型を活用したりすることが言葉だけでは足りない部分を補うことにつながる。自分の腕を使ったり、模型と比較したりした結果、どの子どもも自分の考えや思いを伝え合いながら話し合いを深めることができていた。友達と関わり合う上で、手助けとなるものを準備しておくことが、話し合いのよさや必要性を感じることに結びついていく。



## 寸劇により状況設定を効果的に提示し、活動意欲を高める

### 小学校 5年 外国語活動「フルーツ・パフェを作ろう」

エプロンを着けた母親役のHRTが、教卓の前で家事を忙しそうにしている。そこへランドセルを背負った子ども役のALTが元気に入ってくる。

A: From, I'm home.

(ランドセルを背負ったALTの姿と大げさな表現に、子どもたちはみな笑顔)

H: Welcome, back.

(HRTは家事の手を止め、大きな声で子ども役のALTを迎える)

A: I'm hungry.

(お腹に両手のひらをあて、とってお腹が空いてそう)

H: OK, let's make parfait.

(おしゃれなグラスと美味しそうな果物の模型を提示する)

A: Yey, parfait.

(バンザイをしながら全身で喜びを表現している)

本時で扱う「What do you want?」

「Strawberries, melon and apple please.」のフレーズがこの後に続く。子どもたちは、自分もやってみみたい気持ちで待ちきれないようにHRTとALTのスキットを見ている。「Any volunteers?」のHRTの呼びかけに、子どもたちは一斉に手を挙げた。

#### 1, インプットは効果的になされているか

本時は、表す意味は同じでも外来語と英語では発音が違うことや、できるだけ英語で聞いたまま真似て言うことが大切であることに気付き、状況を設定した場面で会話を楽しもうとすることをねらいとしている。外国語を苦手とする児童にも分かりやすく状況を理解させるため、スキット(寸劇)形式で児童に提示しており、魅力的な小道具も準備されていた。スキットによる楽しい雰囲気の中で、すべての児童へのインプット(新しい表現について「聞く」活動を導入すること)が効果的に行われている事例である。



#### 2, ALTを有効に活用しているか

ALTの役割として、次の5つが挙げられる。

本物の英語の音を聞かせること。

発音指導を行うこと。特に日本語には無い音は口元をよく見せて発音指導をすること。

(但し、過剰にならないように)

ジェスチャーや顔の表情を含めた非言語コミュニケーションを駆使して、双方向に伝え合い、理解し合おうとすること。

発音やイントネーション、表現の間違いなどに注意を払うこと。

(日本人の担任では気付かないことを担任に知らせ、徐々に修正していく)

自分の国の遊びや行事、伝統や文化を子どもたちに伝えること。

これらの点について、担任はALTと可能な限り事前に打合せをし、それぞれの役割について確認したい。打合せを行って連携を図ることで、本事例のように積極的なコミュニケーション活動を展開することができる。

**実生活に結びついた課題設定で思わず考えてしまう授業を創る**

**中学校 2年 数学 「一次関数の利用」**

「一次関数の利用」の時間。「数学的リテラシー」関連から最近注目されている「携帯電話の料金プラン」を取り上げた授業である。

プラン A：基本料金 2400 円 + 通話料 1 分 40 円  
プラン B：基本料金 3800 円 + 通話料 1 分 20 円

先生「どっちが得だ」

生徒「どっちとも言えないよ」

「あんまり使わない人は A プラン，たくさん使う人は B プランが得だよ」

先生「先生は，毎月 50 分ぐらい電話するんだけど，どっちに入ればいいの」

生徒「・・・・」

先生「表，グラフ，式を駆使して考えてみよう」

ここから，先生の配付したワークシートに沿って，表をつくり，式を表し，グラフ化した。70 分を境にして，70 分未満なら A プランが得，70 分を超えれば B プランが得と結論を導き出した。

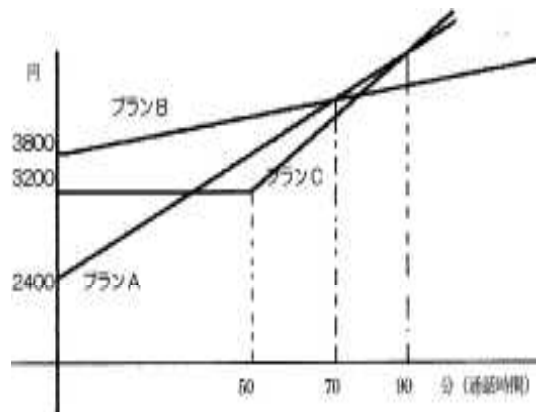
生徒「70 分の時は，グラフが交わっているよ」

「なるほど，グラフで見るとすぐ分かる」

「交点は，連立方程式の解になっているね」

「先生は，あまり使わないから A プランがいいよ」

「グラフを見れば計算しなくともすぐ分かる」



ここまでで，十分「一次関数の実生活への利用」という本時のねらいを達成している。

しかし，先生は，更にプラン C を提示した。

これで今日はだいたい終わりかと

思っていた生徒たちは，びっくり。

生徒たち「50 分無料ってよくある」

「どうしよう」

あっちを向いたり，こっちを向いたりしているうちに「なるほど，分かった」の声。話し合いの輪が自然にできていった。

プラン C：基本料金 3200 円 + 通話料 1 分 60 円  
ただし，通話 50 分まで無料

**良い授業は，生徒が自然に考えてしまう。**

古典落語の最高峰と評される柳家小三治はこう言ったそうである。

「笑わせるのではない。笑ってしまうのが芸，人を笑わせようとする落語は飽きられてしまう」

この授業を見て，この言葉が思い浮かび「落語も授業も同じではないか」と気づかされた。我々教師は，「～について考えなさい。」「考えてノートに書きなさい。」「考えたことをもとにグループで話し合いなさい。」を，度々使う。「考える」と言われなくても考えてしまい，自然とグラフに書き込み，グループでの話し合いを始める生徒の姿がこの授業にはあった。

プラン A，B で培った考え方が，プラン C ですぐに生かされた。しかも，それがいかにも生徒達の身近にありそうな話なのだから，「考えてしまった」のも無理はない。





「展開」・・・種目の特性に触れ、楽しさを味わわせるポイント

## 「人との関わり」を大切にし、種目の特性に触れさせる

### 中学校2年 保健体育「球技 バレーボール」

ランニングの後、ストレッチや補強運動を取り入れた準備運動が元気なかけ声とともに班毎に始まった。

集合・あいさつの後、本時の学習（パスの技能練習）のポイント【相手の名前を呼んでパスを出すこと】の確認があった。

班毎の活動が始まり、体育館には、「！」「！」・・・と名前を呼び合う声が広がり、数種類の隊形でパス練習が行われた。途中からは、【パスを出したら、その場にとどまらず、周りをカバーすること】のポイントが加わり、生徒の動きは、ボールに触れる触れないを問わず、仲間の動きをよく見ながらカバーするものへとグレードアップした。

班毎にしっかりと活動が展開され、学習訓練が行き届いていることがうかがえる。また、運動量も十分に確保されている。その間、教師は各班を巡回し、明確な言葉でそれぞれ指示をしている。

後半は、相手のアタックが床に落ちて決まったり、味方がパスを一回ミスしたりしても、そのボールを追いかけて拾えばまたつながれるという、ワンバウンドOKの特別ルールによるゲームを実施した。生徒たちは、大きな声をかけ合いながら本気でボールを追い、時折、鋭いアタックが飛び出したり長いラリーが繰り返されたりする質の高いゲームを展開した。大きな声を出し合い、汗だくになってボールを追いかけた生徒たちは大変満足そうな清々しい表情で試合を終えた。

授業のまとめでは、班毎の反省の中に「課題を見つけてそれを修正しよう」という次時への視点が含まれており、生徒の代表は班員の意見をまとめて発表していた。教師は本時のポイントに照らしてまとめをし、「周りの人との関わり」の重要性を確認した。



### 各運動の特性に十分に触れさせる工夫をしているか

バレーボールの授業において、数多くボールに触れさせる工夫をすることで、子どもの積極的な参加を促し、技能をさらに高めようとする態度を養うことをねらいとした単元の実践である。

「攻撃とラリーの継続」を種目の特性・楽しさととらえ、生徒の発達段階や要求に応じて技能の練習方法やゲームの行い方を工夫している。仲間同士の「指示の声」を、集団的スポーツで大切な『人との関わり』としてとらえ、声をかけ合うことを大切にされた練習や特別ルールでのゲームを行うことで、生徒は声をかけ合う必要性を感じながら、体全身でゲームを楽しみ、満足感を味わうことができていた。

「各運動の特性に触れさせ、その楽しさを味わわせることが大切」とよく言われる。子どもの目線でよく分析された運動の特性をもとに、楽しさを味わわせることだけに偏ることなく、運動量も確保しながら技能をも高める活動を工夫したい。



## 家庭での実践と関連付け，一人一人に確かな技能を身に付けさせる

### 小学校 5年 家庭「 つくっておいしく食べよう 」

2時間続きのごはんとみそ汁の調理実習の後半部分を参観した。

家庭科室に入った瞬間，二人一組となって作成した調理計画書で確認しながら作業を分担して実到手際よくみそ汁を作っている男子児童の姿に驚いた。煮干しなど出し汁もしっかり考えている。教師の指示を受けながら，みそ汁を作る経験をしているとはいえ，今回は「おばあちゃんの好きな具」など家族のためのオリジナルみそ汁をつくるという家庭での実践につなげる実習であるので，子どもの意気込みも違っていたのではないかと思われる。

その脇には2人の女子児童が，評価カードで作業の様子をチェックしながら，時にはアドバイスや手助けをしている。

次に交代して男子が自分たちとの具や作業の様子の違いを話し合いながら，2人の女子の作業をチェックしていた。

教師は，机間巡視をしながらアドバイスや賞賛を行い，完成した児童とみそ汁の写真を撮っていた。学びを実感させるとともにたより等で保護者に配付し，家庭での実践に結びつけようとするねらいがあるようだ。教室には今までの子どもの活動の様子がコメント付きで掲示されている。

試食の場面では，評価カードを使って味付けや盛りつけを評価しあっていた。感想カードには家庭での実践につながるような感想を書かせた。教師が巡視しながら丸印をつけ，意図的指名で，家庭での実践への関心が高まるような感想を幾人かの児童に述べさせた。実際にいくつかの班の試食をさせて頂いたが，しっかり味見もしながら作業を進めていたので，どの班もだしが効いていておいしいみそ汁であった。

#### 1，確かな技能の定着のために計画的な指導をしているか

本時を迎えるまでに単元全体を見据え，しっかりとした指導をしてきた成果が，作業の様子から見て取れた。調理は経験や技術などの個人差が大きく，ほかの子どもに頼りきりになったり，自信のある子どもがやってしまう傾向もある。今回はみそ汁の水の量の都合でペアになったが，一人一調理を心がけていることが基礎技能の確実な定着に結びついている。調理では協力する大切さやよさを実感させる場面も必要であるが，一人ひとりに確かな技能を習得させる視点も大切である。

#### 2，家庭との関連を意識しているか

「おばあちゃんのためのみそ汁」など家族のためのオリジナルみそ汁をテーマに掲げている。そのため，「一生懸命がんばっておいしいみそ汁ができた」で終わるのではなく，家庭での実践につながるアドバイスをもらい，家でみそ汁を作っておばあちゃんにおいしいと言ってもらって終わることになる。家庭科の場合，家庭生活と関連させることは非常に大切であり，家庭で賞賛してもらつ場を設定することが実践する喜びにつながっていく。

#### 3，子ども同士の評価を大切にしているか

相互評価を取り入れている授業も数多くみられるが，形式的になってしまう場合もある。本事例では，友達の作業を評価することが自分の作業にも役に立つ，自分の作業の反省と家庭での実践に向けた改善に結びつくなど，有効に機能している。また，今回はお互いに評価するだけでなくアドバイスや手助けなど協力しあう姿勢も見られた。



## 自分なりのとらえ方・感じ方を意識させる課題を与える

### 中学校 3年 国語 「挨拶 原爆の写真によせて」

家庭学習として「心を込めて音読をしながら、疑問に思った表現、気になる表現をみつけてくる。」という課題が、生徒には与えられていた。授業は、それをもう一度確認しながら音読するところから始まった。一読後、早速、発表。

「『えり分けなければならぬものは手の中にある』とはどういう意味なんだろう？」

「『やすらかに美しく油断していた。』って？」

「『あ、』ってどんな意味が？」「『向き合った互いの顔』の何を見直す？」

「『何か近づいてきはしないか』の何かって何だろう？」

「『原爆』の詩に『美しい』っておかしくない？」

「『8時15分は毎朝やってくる』って何を意味してる？」等々。

生徒たちは、実にこだわって自分なりに読んできていた。その後、挙げられた表現について、自分はどのようにとらえているのか、周囲の生徒と自由に話をさせていった。



## 1, 自分なりのとらえ方や感じ方を大切にさせる課題を与えているか

家庭学習としてよく出される内容には、

できなかったことや定着させたいことを繰り返しやらせるドリル的なもの(復習)

次の時間に学習することを写させたり、調べさせたり、まとめさせたりするもの(予習)

学習していないことに自力で挑戦させて、分からないことを明らかにさせるもの(予習)

等がある。確かに や の内容は大切なことだが、これだけでは新しい発見や追究する喜びとは結びつきにくい。しかも時間がかかるものが多い。ましてや の内容では、できないことが授業において解明されていくとはいっても、自力でできないことから意欲を失いやすい。しかも、これら の内容に関する家庭学習は、圧倒的に多い。

家庭学習と授業の充実した連携を考えたとき、本時で指示したような「予習的な内容で、一人一人のとらえ方や感じ方を引き出すもの」は、それを授業で取り上げながら突き詰めていくことができ、それが次第に明らかになっていく喜びにつながっていく点、効果が高い。

もっと、家庭学習としてやってきたことが、一人一人のとらえ方や感じ方として、授業においてじっくりと検討されていき、新しい発見や自らの変容を実感させられる本時のような課題を与えていくべきではないだろうか。

## 2, 夢や願いを自覚させ、伸びを実感させる家庭学習が

一斉に同じ課題を与えれば、どうしても一人一人の学力の違いによって、簡単にできてしまい手応えを感じない児童生徒がいる一方、できなくて苦しむ児童生徒がいる。できなければ、昼休みや放課後に残らせて仕上げさせることにもなる。それでは、どの児童生徒も家庭学習をすることのよさを感じることはできない。

授業との関連を図る家庭学習の内容とともに、児童生徒一人一人の課題や長所を、自らの夢や願いとの関連から自覚させ、継続して支援し、その実現に向けて着実に歩んでいることを実感させるような家庭学習も考えていきたい。

## 道徳の授業を充実させる特別支援教育の視点を生かした学級経営

中学校 1年 道徳 主題名「いかに誠実に生きるか」(自主・自律)  
資料名「トモ君へ」

この授業は、思春期前期である中学一年生に「自分自身を見失わず、誠実に生きようとする姿勢の大切さ」について深く考えさせる質の高い内容であった。担任が生徒を呼名するときには、「さん・君」をきちんとつけ、生徒の表情も大変明るく、温かい学級経営に力を入れていることがすぐに分かる授業であった。

授業の内容は、家庭科の調理実習の後片付け場面において、男子で一人だけまじめに皿洗いをしていたら他の男子にからかわれてしまう場面、本人の葛藤場面、そして、悩みながらも自分の仕事に誠実に取り組む場面が描かれていた。生徒にとって大変分かりやすく、自分のこととして深く考えることができる流れであり、自分の思いを本音で語り合っていた。特に、「心の線分図」で名前カードを利用して自分の価値観を表示し、心の揺れに応じて変更する試みは、大変効果的であった。また、道徳の授業の充実のために、

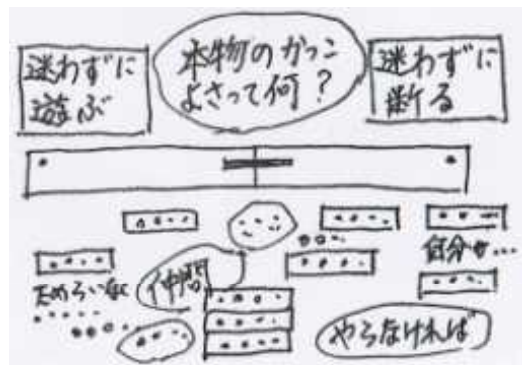
道徳アンケートを実施する。

「学年便り」に道徳の授業内容や生徒の感想を掲載する。

板書をデジタルカメラで撮影し、授業記録として残す。

等の工夫が見られた。

板書をキーワードだけ簡潔に記録して進めると、さらに焦点化した授業になるであろう。いずれにしても、生徒一人一人が自分の考えを持ち、班・学級で話し合い活動を重ねることで、お互いの考えを認め、話し合いを通して価値の追求をしていった望ましい道徳の授業実践である。



### 子どもが安心できる学級づくりを大切にしているか

最近、様々な教育活動においてすべての児童生徒を特別支援教育の視点で支援しようと言われている。これは、発達障がいのある子どもには「ないと困る」支援であり、どの子どもにも「あると便利」な支援を増やすという意味である。このことは、幼稚園児や小学生だけでなく中学生にも共通することである。児童・生徒が安心して学校生活を送り、学習や運動に励むためには、安心して生活できる学級の存在が必要である。教室環境を整え、規律ある学びの空間をつくる努力が今、改めて学校に求められている。

各教科・道徳等の授業の土台になっているものは、「子どもが安心できる学級づくり」である。たとえ中学生であっても、次に自分は何をしたらよいのか意識できない生徒や学習規律を忘れがちな生徒がいるであろう。そのような場合、教室にきちんと計画表や当番表、仕事の段取り等が掲示してあれば、そのような生徒にとっても迷わずに安心して自分の責任を果たすことができる。ひいては、教室における自己存在感を持つことにもつながる。

通常学級においても

見通しを持たせる(次にすることを示す)

分かりやすく覚えやすく(視覚的に示す)

という視点は、もっと重視されて然るべきである。学級のどの生徒にも分かりやすい指導法を心掛けることは、特別支援教育の視点で発想することでもある。

この道徳の授業を実践した学級では「人間関係調整力」を育てながら、以下のようなことについてもしっかりと配慮していた。

見通しを持たせる教室環境の整備  
日直の仕事表、生活チェック当番表、  
委員会仕事分担表、図書(放送)当番表、  
給食配膳方法、清掃場所校舎見取り図等

認め合う人間関係づくり

「人間関係に係わるアンケート」による

学級と生徒のプロフィールの把握と分析

信頼関係づくりゲームの実践

教室後方掲示板に学級の出来事を短冊形式で記録・累積掲示



# 学校における食育の推進について

## 1 なぜ食育は大切なのか？

近年、社会構造の変化に伴いライフスタイルや価値観・ニーズの多様化、食生活やこれを取り巻く状況が大きく変化してきた。このようなことに伴い、児童生徒の食生活においては、偏った栄養摂取や朝食欠食、さらには、外食や加工食品への過度の依存等、様々な問題が指摘され、児童生徒への心身への影響が懸念されている。本県においても、肥満傾向児の出現率が全国平均を上回る状況にあるなど、食生活に起因する様々な健康問題が危惧され、食育の一層の充実が求められている。

## 2 福島県の食育推進は？

本県教育委員会では、『未来へつなくふくしまの食育 ~ふくしまっ子 食育指針~』を策定し、学校における食育の方向を次のように示している。

### 基本的な考え方

- 1 食育は、知育、徳育及び体育の基礎と位置付け、生涯にわたって健康で生きいきとした生活を送ることを目指す。
- 2 一人ひとりが望ましい食習慣や食に関する適切な判断力を身に付けられるよう、家庭や地域との連携のもと、教育活動全体で取り組む。

### 目標

- 1 発育・発達段階に応じ、食に関する知識や食を選択する力を養い、それを生かして、自ら望ましい食生活を実践していくための「食べる力」を育む。
- 2 食を通じ、自然や人々との関わりの中で「感謝の心」を育む。
- 3 ふくしまの気候・風土に根ざした食文化を理解し「郷土愛」を育む。

## 3 学校全体で推進するポイントは？

- 1 子どもたちの食生活の実態を明らかにし、課題を明確にして取り組む。  
~ 視点を明確にした児童生徒、保護者への意識調査等による実態・課題把握を！
- 2 食育コーディネーターを中心として計画的・組織的に取り組む。  
~ 年間を見通した学校全体・教職員全員での取組みを！
- 3 各教科や学級活動等に食育を学ぶ場面を位置付け、各教育活動との関連を図る。  
~ 実態からねらいを設定し、その達成を目指した効果的な学びの場面の構想を！
- 4 「生きた教材」として学校給食を活用する。  
~ 学校栄養職員との緊密な連携を！
- 5 家庭や地域と連携・協力し、あらゆる機会や場を活用する。  
~ 保護者や地域社会も食育の大切さを認識しています。是非、積極的な啓発を！
- 6 食に対する興味・関心を高め、食に親しめる体験活動を大切にする。  
~ 体験活動を多く取り入れ、豊かな食の学びを！

## 4 授業を進める上でのポイントは？

各教科等の持つ特質を大切にする。  
子どもたちの実態から、指導する「ねらい」を明確にし、内容・資料を精選して臨む。  
図やグラフ等でインパクトのある「導入」を心がける。  
体験や実習を取り入れ、理解を深めさせる。  
以後の各自の生活に生かせる具体的な内容を工夫する。  
家庭や地域社会と連携を図った取組みを工夫する。  
ねらいに沿った「まとめ」をし、事後指導を充実させる。



## 5 参考となる資料

未来へつなく福島県の食育 ~ふくしまっ子食育指針~  
ふくしまの食育指導資料(実践事例集)  
学校における食育の推進に向けてNO. 2  
ともに、県教育委員会ホームページでご覧いただけます。

## 作成にあたってご協力いただいた小・中学校

会津若松市立鶴城小学校，会津若松市立謹教小学校，会津若松市立門田小学校  
喜多方市立第二小学校，喜多方市立塩川小学校，会津坂下町立坂下小学校  
柳津町立柳津小学校，会津美里町立宮川小学校，会津美里町立本郷第一小学校

会津若松市立第六中学校，喜多方市立第二中学校，喜多方市立山都中学校  
西会津町立西会津中学校，会津坂下町立第一中学校，柳津町立柳津中学校  
会津美里町立新鶴中学校

## 表紙，イラスト

馬場 泰（会津教育事務所）



### 発行者

福島県教育庁会津教育事務所

平成22年3月 発行